

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八一八

『揺れる情(こころ)』通信⑩

土屋宜之

京都医療センター緩和ケア創設者・稲荷山武田病院院長
2022サッカーワールドカップにおける日本人サポーターの試合終了後のスタジアム清掃も代表イレブンのロッカーームの掃除・整頓、五羽の折鶴もこの日本人の心映えは本居宣長さんの言葉を借りれば「もののあはれ」に入ると思われます。

その日本イレブンが勝利後のインタビューで「日本から応援してくれている情熱(感動・うごくこころ)はカタルに届いています。ブラボー、ブラボー、ブラボー」と叫んでいました。この日本人の心映えも、もちろん「もののあはれ」です。またこの日本人の情(こころ)は日本からカタルへ感く(うごく)情(こころ)と言っても差し支えないでしょう。

また、アフガニスタンの広大な砂漠に灌漑用水路を造り、緑の大地に変えた医師中村哲先生の心映えも「もののあはれ」だと思います。凶弾に倒れてしまわれたのには本当に言葉がありません。

京都国立近代美術館

4月2日～5月26日

《没後百年 富岡鉄斎》

世に「最後の文人画家」と称えられる富岡鉄斎。幕末、京都の商家に生まれた彼は近世都市の商人道徳を説いた石門心学を中心に儒学、国学、仏教等の諸学を広く学びながら同時に南宗画、やまと絵等をはじめ多様な流派の絵画も独学し深い学識に裏付けられた豊かな画業を展開しました。

幕末に人格を形成して明治初期には神官として古跡の調査と復興に尽力し、やがて官を辞して市井の画家として生きた鉄斎は、令和六年末で没後百年を迎えることになりました。このたびの展覧会ではこの記念のときに向け、彼の画業と生涯をあらためて回顧します。名作として繰り返し取り上げられてきた作品はもちろんのこと、名作として知られながらも名作展では目にする機会の乏しかった作品や近年になって再発見され、あるいは新に見出された作品などもご覧いただきます。

《デジタルは万能か》

常楽臺住職 今小路覚真

拙寺に伝わる貴重な品、全て学術研究以外は非公開ですが、その一つである約七百年前に著わされた写本「看病用心鈔」を翻刻しています。

七百年前の紙と墨跡が見事に残っているのです。しかもその筆遣いから、筆者の様子まで、例えわたしの先祖であるとはいえ、しのばれるのです。何かにつけてデジタルが声高に叫ばれる現今です。たしかに便利といえれば便利でしょうが、裏に見え隠れする正体不明の存在が気掛かりです。

更に、カセットテープ、ビデオレコーダー、ワードプロセッサ等々一世を風靡したデジタル機器は、どうなったのでしょうか。

僅か数十年前で目を見張る変化を遂げています。七百年前の人の手で書かれた紙と墨との記録が生きて残るように、現代のデジタル機器は残って、後世に息吹きが伝わるのでしょうか。

《トマトについて》

イタシヨク 福村直

イタリア料理と切っても切れないトマト。世界に八千種存在すると言われ、色は赤だけでなく白、黒、黄と多彩で形も凹凸のあるものから細長いものまで様々。また品種によっては生食よりも加熱調理に向いているものがあります。この様に多種多様のトマトがあるのと同じく、国によって好みや味わい方が変わります。

例えばポルトガルでは生で食べてもソースやケチャップ等の加工品は少なく、イタリアではトマトジュースがほとんど飲まれず、甘味と酸味がありコクのあるトマトが好まれます。韓国ではトマトを果物として考え、輪切りにし砂糖をまぶして食べます。こうして世界中で食されているトマトですが、食用としての歴史はまだ浅く18世紀に入ってからのことでした。発見当時は今のように品種改良が行われておらず、観賞用として育てられていました。かなり画期的な食材だったようで、それまで塩や酢、蜂蜜などをソースに使っていたイタリア料理に大変革をもたらしました。イタリア語でトマトは金のリンゴと書きパスタやピッツアをはじめ幅広い料理に使われます。

季節の家庭料理

田村真紀

《四月 せりと蓮根だんごのスープ》

春の七草のひとつ、せりはカロチン、ビタミンC、カリウム、鉄分などの栄養成分が豊富なだけでなくその独特の香り成分にはリラックス効果とともにデトックス効果もあるそうです。

《作り方・約四人分》蓮根二百五十グラム・★薄力粉大匙四、塩少々・まいたけ一パック・せり二束(洗ってざく切りにする)・☆(昆布とカツオのだし汁三カップ・塩小匙半・薄口醤油大匙半)蓮根は皮を剥いてすりおろし、★を加えて混ぜ滑らかにする。まいたけは細かくほぐして鍋に入れ、☆を加えて中火で三分くらい煮る。蓮根をスプーンで丸めて鍋に加える。崩れやすいので火が通るまで触らないようにしながら、弱めの中火で三、四分煮る。器に盛ってせりを散らす。

《大原流声明雑話⑩》

實光院住職 天納玄雄

声明は僧侶たちが宗教儀礼のなかで複雑な旋律を唱える仏教音楽であるが、なぜ音楽を用いて儀式を行うのであろうか。

お釈迦様の時代は経典を文字として残す文化がなかったため、教義を覚え間違わないように、音曲を用いたのが始まりだという。次第に儀式として整備されていく中で、旋律には新しい意味合いが加えられた。いつの頃からかは不明であるが、音階や音そのものに様々な仏、季節、時間、方角など様々に対応させて解釈するようになった。そこには中国の五行思想や日本の陰陽思想の影響もあったのだろう。

そういう意味では、音楽の様相を持っている声明であるが、その目的は音の配列によってお経に呪力をもたせ、祈願するための旋律と言えらるだろう。